

上州の飛脚

— 輸送網、金融、情報 —

巻島隆 著



みやま文庫

まえがき

私の亡き母が東京出身のため、母方の祖父母（祖父は日本画家の高村草樹（本名廣吉）、戦前から高度成長期にかけて歌舞伎座で舞台背景を画いた、一九九九年に九十三歳で死去。京都出身の祖母ツヤは八五年に七十五歳で死去、一男二女を育てる）が埼玉県入間市の霊園で眠っている。生前、祖父母にはかわいがつてもらい、世話になったこともあり、毎年秋の彼岸になると墓参に出かける。昨年も妻と平日に自動車を運転し、関越自動車道に乗って群馬県から埼玉県へと南下した。私の好きな風景である関東平野の広大な空と緑、点在する都市の中をひたすら突っ切り、圏央道を西行し、狭山丘陵の遠望できる入間ICで高速道を降りる。

よく思うことがある。高速道をガンガン走るトラックの群れ。みな企業は別々だが、あたかも仲間であるかのようにレーンを連なるトラックたち、追い抜こうと加速して走る荷箱、荷箱……。その様はまさに群れというにふさわしい。新型コロナウイルス禍による巣こもり需要のため、ネット通販で買い物をする機会が激増した。だからトラックがとても多い。平日だけあってトラックではぼ埋め尽くされている。彼ら物流の担い手がいなければ、我々の社会生活は成り立たない。彼らが動くからこそ、スーパーから品物が払底せず、便利な生活を享受できる。物流業

者は主要幹線道をひたすら走り、給油や食事にサービスエリアやパーキングエリアに立ち寄る。車体と肉体にエネルギーを補充する。トラック運転手は無線を使い、業者の違いを超えて交通を含む様々な情報も交換する。

右の様子を江戸期の交通事情に重ねてみる。馬に荷物を付けて街道を往来する宰領飛脚という存在がいたが、彼らは各宿場町の問屋場とちやば（人足と馬を雇う施設）で馬を継ぎ立てさせ、時間に追われるように目的地を目指した。喩えれば、高速道は東海道や中山道などの五街道に当たる。サービスエリアは宿場だ。トラックは馬、運転手は宰領である。宰領飛脚も業者を超えて、宿場で街道沿いの情報を交換したものと思われる。宰領たちの横断的つながりを示す常夜灯、水盤、石碑などが街道沿いに残され、それら金石史料が同じ職種同士の連携を証拠立てる。（まるでトラックは現代の飛脚だな）と思う。現代物流も近世物流も基本の骨格は変わっていない。

私は就職浪人だった二十代後半に運送のアルバイトをしたことがある。二トントラックを駆って病院や福祉施設でリネンを配達・回収した。よく体験したのが信号交差点で右折しようとして対向車を待っていると、相手のトラックが遠くからパッシングして（早く曲がれ）と促されたことだ。これは何度もある。（同じ運ぶ仕事に携わるトラック同士の連帯感か）と実感したものだ。

飛脚の本質はネットワークと金融と情報であると、約二十年の飛脚研究の中でそう思い至った。これからそのことを記述していこうと思う。二〇一五年に刊行した拙著『江戸の飛脚―人と

馬による情報通信史―(教育評論社、二〇一五年)では日本列島を視野に飛脚の全体像を素描した。本書では上野国(群馬県)にターゲットを搾っている。前著と合わせてワンセットで本書をお手に取っていただけたら、著者には無上の喜びである。

二〇二二年二月十四日

著者記す

目次

第一章	飛脚の淵源を探る	3
第一節	飛脚とは	3
第二節	飛脚の平和利用	12
第三節	守護大名の「飛脚」	14
第四節	家出少年が見た飛脚	17
第五節	ヤクザと飛脚	21
第六節	多様な飛脚	25
第七節	飛脚への眼差し — 蔑視と神秘 —	28
第二章	飛脚問屋の上州参入	30
第一節	蚕と飛脚の関係	30
第二節	十七屋孫兵衛の進出	32